随　筆

技術と文化
――パプアニューギニアで考えたこと――

山　口　　修*

パプアニューギニア入国

ちょうど1年前の4月下旬，日本でいえばゴールデンウィークが始まるころ，私は太平洋の国々をまわる旅行の最後の目的地パプアニューギニアに向かっていた．ガダルカナル島のホニアラを後にして飛び立った定員10名ほどの小さな飛行機はおだやかなソロモン海域を北西に進路をとっていた．大小の島々の輪郭が白く美しい形を見せていた．

心をなごませるようなその光景とは裏腹に，不安が私をおそう．あのトランクは本当に明日手元にもどるのだろうか．「御理解下さい．飛行機は小さいのですから重量制限は守ってもらわなければなりません．このトランクは明朝の便でキエタに着くように手配しますから早くお乗りなさい．もう時間はありませんよ．」だが，係員のその言葉通りになったとしても，明日の朝私は荷物の到着時間より早くキエタを去っているに違いないのだ．いったいどうすればよいのだ．

やがて飛行機は国境を越えソロモン諸島からパプアニューギニアへ．しかしまだ，あいかわらずソロモン海域に浮かぶブーゲンビル島のキエタ空港に着いたばかりだった．ポートモレスビー行きの便を待つためだけの1泊は，旅の疲れをほぐす恰好の休日となるはずだったのに，厄介な問題を片附けなければならなかった．機上で練った作戦にしたがって空港の親切そうな係員をつかまえた――もっとも，皆好意的に見えたのだからたまたま手のあいてる人をつかまえただけだったのだが．「私は明朝予定の便を変更するわけにはいかない．私の代わりにこの預り証と引き換えに私のトランクをここで受けとって下さい．これが鍵です．どうぞ自由に開けて税関を通過させて下さい．それがすんだらポートモレスビーに向けて転送して下さい．」これだけのことをわかってもらえるまでに何分かかっただろうか．幸い，心を傾けて話をきいてくれた．反芻するかのように質問を重ねなら．彫りの深い顔，深い凹みが影になって，見えなくなってしまいそうなかれの眼には，いたわりの色がありありと現われていた．「心配しなさんな．私を信用して，すべてを任せなさい．」艶のある黒い皮膚が何と頼もしく見えたことか．

一難去ってまた一難．ホテルは遠いのだ．バスやリムジンどころかタクシーもない．いったい皆はどうやって空港を出て行ったのだろう．おもむろにまわりを見まわすとライトバンが1台とまっている．ともかく行ってみよう．「いいですよ．一緒に乗せて行ってあげますよ．」ところでお礼はどうしよう．日本から持ってきた残り少ないおみやげはあのトランクの中だし，まだ換金することもできないでいるのだ．「心配しなさんな．あなたの国は私たちにまだ充分とはいえないけれど技術的援助をしてくれています．私からのささやかなお礼ですよ．」揺れる車の中で交わした，実際にはもっと低次元の語彙を使っての会話ではあったが，心の通う半時間であった．ブーゲンビリアこそ私の目にはついぞ映らなかったが，こうしてブーゲンビル島は私にとって思い出深い島になった．そして初めて訪れるパプアニューギニアに対して私は深い愛着を覚えた．

あくる朝，ホテルの主人の車で再び空港に到着．兄弟のようになつかしいあの係員がすぐに私を見つけて，「こっちに来なさい」と私をひ

* 山口　修（YAMAGUCHI Osamu），大阪大学，文学部，美学科，音楽学講座，助教授，M. A. 民族音楽学

っぱって行く．何か落度でもあったのかと，一瞬不安が心をよぎる．「これがあなたのスーツケースですね．」何と，私より先に荷物は着いていたのだった．ありとあらゆる時刻表を調べて，係員にも尋ねて，こんなことはあり得ないと思っていたのに．「臨時便があったのです．」今晩ポートモレスビーのホテルで私が必要とする本や書類のつまったスーツケースはこうして，あっさりと私の目の前に置かれているではないか．文字通り「ありがたい」結着であった．

大阪大学創立50周年記念事業「南太平洋学術調査交流計画」に関連して

ところで，この旅行は上記計画のための事前調査（折衝）という目的で太平洋諸国・地域をまわるものであった[1]．総合大学が全学をあげて携わる記念事業の１つを具体化するための手がかりを得るべく派遣された私にとって，荷が重く緊張の続く旅行であった．しかし，この随筆の前半に書いたようなエピソードもあり，私が専門とする民族音楽学のフィールドワークをする旅行と本質的にかわらない暖みのある人間関係に満ちたものとなったのがうれしいことだった．

これに加えて，西ドイツに家族と共に２年生活してからあまり時間をおかずに私のもともとの専門地域オセアニアに専攻分野を超えた学際的視野に立って直接アプローチできた体験は，私に学問上の転換期を与えてくれたばかりでなく，この地域が日本と関わりをもつことを望んでいる事実を肌で感じさせてくれた点で貴重なものであった．

ポートモレスビーにて

パプアニューギニアの首都ポートモレスビーは新興国のもつ悩みと活力を同時に感じさせる都会だった．御多分にもれず地方からの人々の流入で人があふれていることがこれら２つの側面での印象を強くしていた．

田舎町キエタの小さな空港とは比較にならないほど人にあふれたジャクソン空港に，持つべきすべての荷物と共に到着した私を迎えたのは顔なじみのアメリカ人の民族音楽学者ドン=ナイルズ氏だった．かれのジープがほこりをあげて道を突っ走る．「君はラッキーだよ．こんなによい気候のときに来られて．ポートモレスビーの気候は文字通りアグリーなんだぜ．」そんな言葉をききながら私の耳は「正常な」英語に一種の異和感を覚えていた．パプアニューギニアに身も心も捧げているかれの学者的良心を私は微塵も疑ってはいないし，それがシュヴァイツァー的なおしつけがましい慈善でないことも知っている．だがかれの母国語の能力だけはどうしようもなく身についている．２人共通の専門的な話題を追いながら私の耳がキャッチしようとしていた音は本当のところ街の雑音が発する「雑音」のかたまりだった．

市場で人々が缶詰でない，土のついた野菜や目をむいた魚を買っている．しかし，ちょっと車で走ればもう缶詰だらけの店が並ぶ．はだしで歩く子供，男，女．しかし，にくいほどきまった腕輪や入れ墨がかれらの動きを生あるものに感じさせる．

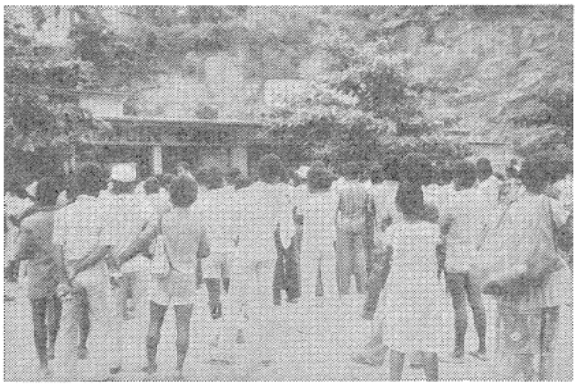

写真１　街角でテレビに見入る人々

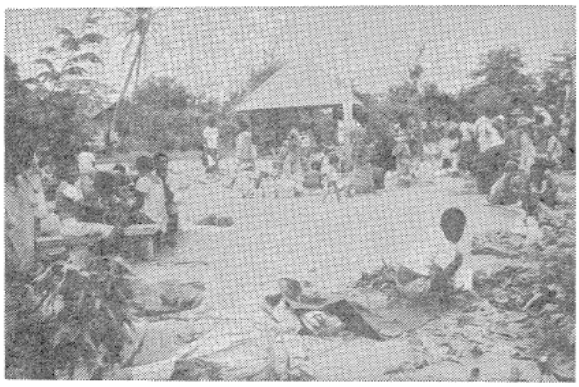

写真２　ポートモレスビーの一角コキの市場にて

車が行き交う．タクシーもある．乗合自動車もある．トラックが走る．丘また丘を越えて．坂を登ったり降りたりすることは何と心地よいのだろう．シアトル，サンフランシスコ，千里丘陵……と連想がつづく．舗装道路の横には屋台が並ぶ．

機械文明はけっしてこの国をおしつぶしはしないだろう．アルコール中毒，失業（というより未就業），暴力などはごく一部の一時的な現象にすぎないのだろう．（少なくともそう願わずにはいられない．）

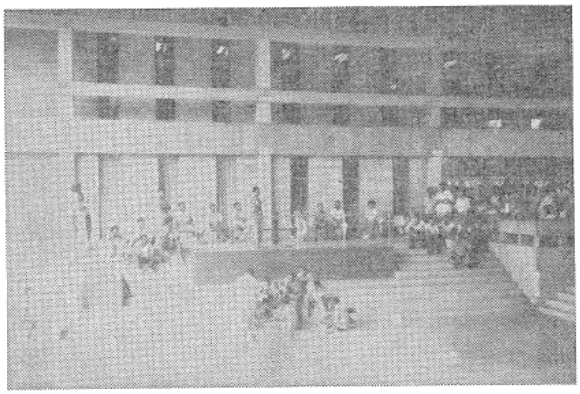

写真3　パプアニューギニア大学に集う学生たち

パプアニューギニア各地から，近隣の太平洋諸国から集まった学生たちで活気あふれるパプアニューギニア大学では集会の場で何やら情熱的に議論をしていた．少し離れたところでは，恋人たちが寄り添っている．おや，楽器の音がする．竹でできた口琴をはじいている．小さい音量ながら情感あふれる音色をたたえた響きがかすかに伝わってくる．私がよく引き合いに出すマーガレット=ミードの文章が現実味を帯びて思い出される．

音楽について考えてみるとしよう．たとえば，リズムを打ち出すことしかできないような竹の棒とか，2つ3つの指孔しかない笛といったような，もっとも単純な楽器を使っていた民族と比較するのに，シンフォニーオーケストラによる音楽をもつ近代的民族を対置させてみれば，楽器製作という点では大きな進歩をみてとることができる．だがもし，異なるインディアン部族の笛を比較したり，あるいはバリ島のガムラン音楽とヨーロッパのオーケストラ音楽——どちらも複雑な機構の楽器を使っているし，音階や音律の知識の上に立っている点では似たような2つの音楽——をくらべてみるとき，もはやどちらの方が進歩しているとはいえなくなる．それぞれ違った音楽であり，それぞれ意味や感じ方が違う音楽なのである．荷物を背負う奴隷たちを束にしても荷車にはかなわないとか，荷馬車よりも現代のトラックの方がすぐれているといったようには，音楽の優劣をつけることはできないのである[2]．

まさに技術の進歩と文化の洗練が混同されてはならないことを私は熱気の中で確認した．

注：1）山口 修（1983）「事前調査報告Ⅰ」大阪大学創立50周年記念南太平洋学術調査交流計画事前調査報告書，大阪大学．
2）MEAD, Margaret (1959) People and places. New York : The World Publishing Company.